

「面白い発話」の言語間対照のための準備的考察
**A Preliminary Study for Cross-Linguistic Comparison
of "Funny-Talk"**

定延 利之¹, 奥村 朋恵², 宿利 由希子³, 昇地 崇明⁴
Toshiyuki Sadanobu, Tomoe Okumura, Yukiko Shukuri, Takaaki Shochi

¹神戸大学, ²元・サンクトペテルブルク国立大学,
³ノボシビルスク国立大学, ⁴CLLE-ERSSaB UMR5263 CNRS & LaBRI UMR5800 CNRS, France
Kobe University, St. Petersburg State University, Novosibirsk State University,
CLLE-ERSSaB UMR5263 CNRS & LaBRI UMR5800 CNRS, France
sadanobu@kobe-u.ac.jp

Abstract

Since the field of verbal behavior theory developed under the leadership of linguistic philosophers, cultural diversity has not always received adequate attention. In recognition of the above, the authors have been preparing to construct a multilingual database of funny talk. The first author recorded audio and video (about 150 episodes over four years) of the funny talk of Japanese native speakers. The second and subsequent authors are working with the first author to begin recording the funny talk by Japanese language learners in Japanese and their native languages (Russian and French) (about 30 episodes at present). In this presentation we will discuss the specifics of the work currently in progress and the actual conditions surrounding the recorded speech, together with the results of an opinion survey on speaking funny talk. At present, we can draw three conclusions. The first concerns the content, the second relates to methods, and the third relates to the act of funny talk itself.

Keywords — Cross-Linguistic Comparison, Funny Talk, corpus, Japanese, French, Russian

1. はじめに

伝統的な発話行為論は言語哲学者に先導される形で発展してきたこともあり、文化の多様性への目配りが必ずしも十分にはなされていないと言われることがある[1]。これまでに、特に文化差を考慮しない伝統的な発話行為論の観点から、丁寧な発話[2]やアイロニー発話[3]だけでなく、ジョーク発話[4]や漫才のボケ発話[5]のような「面白い発話」も分析されてきているが、近年では文化の多様性を重視する立場[1]も活発になっている。文化間で「面白い発話」がズレていること、個々の言語文化がその文化に特有の「面白い発話」を持っていることにも注意が払われてしかるべきだろう。

以上の認識にもとづき、発表者らは「面白い話」の多言語データベースを構築する準備を進めている。定延は現代日本語の民間話芸の調査の一環として、日本語母語話者（プロではなく一般人）による日本語での「面白い話」を収録している。また、奥村・宿利・昇地は、定延と連携する形で、日本語学習者による日本語と母語（ロシア語・フランス語）での「面白い話」を収録している。

本発表では、このような現在進行中の作業の経緯と収録された話の実際を、「面白い話」に関する意識調査の結果とともに具体的に示す。次の第2節では作業を紹介し、第3節～第5節では現時点で暫定的ながら得られている観察を述べる。第3節は「面白い話」の内容（ジャンル）に関する観察、第4節は「面白い話」のやり方に関する観察、第5節は「面白い話」をすること、あるいはしたことに対する感じ方の観察である。最後の第6節はまとめである。

2. 作業の紹介

定延らは、日本語母語話者による「面白い話」を2010年度から音声・動画の形で収録し、次のようにインターネット上で公開してきた。

2010年度：

<http://www.speech-data.jp/kaken/chotto1.html>

2011年度：

<http://www.speech-data.jp/chotto/2011/>

2012年度：

<http://www.speech-data.jp/chotto/2012/>

2013年度：

<http://www.speech-data.jp/chotto/2013/>

現在までに公開された日本語母語話者の「面白い話」は約150話あり（1話あたり約3分）、今年度も収録・公開を続行する予定である。これらの「面白い話」には日本語の字幕を付け、さらに2010年度のものには試験的に英語・フランス語・中国語の字幕を追加して、日本語能力があまり高くない（あるいは全く無い）者にも大意がわかるようにしている。

さまざまな話のうち、特に「面白い話」に焦点をしばって収録・公開するのは、もちろん負担軽減のためでもあるが、発話データベースの「バランス」を意識しているためでもある。一般のデータベースと同様、発話データベースもその有用性はバランスに大きく依存している。だが、現代日本語の発話としてそもそもどのような発話のタイプがあるのか、つまりどのような「状況」で、どのような「発話キャラクタ」[6]によって、どのような「スタイル」でおこなわれる、どのような「発話行為」の発話があるのか、そして各々の発話のタイプがどのような割合を占めているのかがまだほとんど解明されておらず、発話データベースが各々の発話のタイプをバランスよく含もうにも、含みようがないのが現状だとしたら（会話分析における、計量的アプローチに懐疑的な立場[7]も、このことと無縁ではないだろう）、当面必要なのは、まだ気づかれていない発話のタイプを明るみに出し、「状況」「発話キャラクタ」「スタイル」「発話行為」のインベントリを充実させていくことではないか——インフォーマントに「面白い話」を披露させるという企画は、以上のような考えのもと、穏やかな談笑が続く「普通の話」ではなかなか現れないさまざまな発話のタイプが短時間のうちに続出しそうな会話形態として考案されたものである。

また、「面白い話」の収録・公開は、話の面白さを競うコンテストの一環としておこなわれている。コンテスト形式の導入は、発話収録の負担を軽減できないか検討する試みでもある。つまり、フィ

ールドに出向いてインフォーマントに仲間に入れてもらい、謝金を支払うという通常の発話収録は、収録者にとって肉体的・精神的・経済的負担が大きいため、これらの負担を被収録者側に転嫁し、「コンテストにエントリーしたい者は自分の発話を自身で収録し、動画音声ファイルをコンテスト事務局に送信し、謝金を求めない」という形にできないかと検討する試みでもある。だが、この試みはいまのところうまくいっていない。自身で収録した動画音声ファイルを事務局に送信してくる者はほぼ皆無であり（2011年度に1グループ存在したが、送られてきた作品はBGMの流れる店内で収録されたものであったため著作権の問題でエントリーが認められなかった）、事務局にコンタクトをとって収録を依頼してくるケースがほとんどである。

但し、コンテスト形式がまったく無意味とは我々は考えていない。自然会話における一般の発話を理解するにはそれまでの文脈や会話参加者間の関係といった背景的な知識が重要であるが、インフォーマントをコンテストにエントリーさせ、見ず知らずの視聴者による評価を意識させることによって、インフォーマントが自らの発話を、背景的な知識がなくても理解できるように組み立てるといったことが期待されるからである。実際、自然会話における一般の発話と違って、エントリー作品に「意味がわからない」発話が極端に少ないのは、コンテストという形式の効果と判断している[8]。

定延と連携する形で奥村・宿利・昇地は、サンクトペテルブルク国立大学・ノボシビルスク国立大学・ボルドーモンターニュ大学で日本語を学ぶ学生や日本語教員その他関係者に働きかけ、彼らの日本語と母語での「面白い話」を収録している。結果としてインフォーマントは、同じ「面白い話」を2回おこなっていることになるが（サンクトペテルブルク国立大学関係のものはまず日本語版を収録した後にロシア語版を収録。但し7番～9番（「授業に来て！」「人気の先生」「官能小説」）以外は、日本語版収録の前にロシア語で一度話して

もらっている（つまり合計3回話している）が収録はしていない。ノボシビルスク国立大学・ボルドーモンターニュ大学関係のものは、まず母語版、次に日本語版を収録、明らかな2回目の「はしより」は現在のところ確認されていない。コンテストは現在のところ日本語によるものに限定されているため、母語の「面白い話」は公開していないが、日本語の「面白い話」は公開している。

2014年度：

<http://www.speech-data.jp/chotto/2014F/>

公開されている「面白い話」は現時点で28編あり、その内訳はロシア語母語話者のものが25編（サンクトペテルブルク国立大学関係22編・ノボシビルスク国立大学関係3編）、フランス語母語話者のものが3編で、サンクトペテルブルク大学関係のものが大半を占めるが、今後他のものも順次増やしていく予定である。（英語や中国語など他言語も加える予定である。）

ロシア語を母語とする日本語学習者については、「面白い話」コンテストへの参加勧誘に乗ってエントリーを果たした学習者だけでなく、これを拒絶した学習者も含めて、「面白い話」をすることに関する意識をアンケートによって調査した。

さらに、ロシア語であるために公開は現在のところ予定していないが、ビジネス支援をおこなう「日本センター」で日本語（初級後半）を学んでいる社会人のロシア語母語話者による「面白い話」も7編収録している。

今年度の収録はまだ続いており、発話を文字に書き起こして字幕を付ける作業も始まっていないが、現段階で暫定的ながら得られている観察を以下に述べる。次の第3節では「面白い話」の内容（ジャンル）に関して述べる。

3. 「面白い話」の内容（ジャンル）

日本語母語話者の「面白い話」に比べて、日本語学習者の「面白い話」はまだ少ないが、それでも「面白い話」の内容（ジャンル）について、違いが見られている。

日本語母語話者の場合、「面白い話」と言えば

個人的な体験談がほぼ全てである。これまでに収録した話のうち、体験談と考えにくいものは、「自分は列車の車内アナウンスで『不審物（ふしんぶつ）を見かけた方は〜』と聞くといつも不審な仏様をイメージしてしまう」という、恒常的で一回性が無く、その意味であまり体験談らしくないものが僅かにある（2011年度2番「不審物」）ぐらいである。

この傾向は、書かれた話について従来なされている指摘とも一致する。全国から「おもしろい話」（興味深い話ではなく笑える話という意味をより強く持たせるために「おもしろい」をひらがな表記にしたとされる）のweb投稿を募り569話を収録した[9]によれば、「ほとんどが体験談もしくは知り合い（友人、家族）から聞いた話であった。少なくとも、そうであるかのような形式でかかっている」（p. 17）という。

体験談は日本語学習者の「面白い話」にも多く見られるが、学習者の「面白い話」には体験談の他に、個人的な体験とは切り離された一般的なジョークあるいは小咄のようなものが見られる。ロシア語母語話者の「本当のロシアの男の話」（厳冬のシベリアを走行中の寝台列車から転落した男が寝間着姿のまま走り続けて駅で列車に追いつき、そのまま何もなかったように自分の寝台に戻って寝た。これぞ本当のロシアの男）、フランス語母語話者の「大きい口のカエル」は3人のスイス人農夫を登場させてその「異人らしさ」を笑うというもので、いずれも話し手の個人的な体験とは関係がない。

そもそもロシア語では、日本語の「面白い話」には次の4つが対応し得る。

1) スメシュナヤ イストリヤ (Смешная история, “Funny story” 「ウケる話」)

2) インテレスナヤ イストリヤ (Интересная история, “Interesting story” 「興味深い or びっくりした話」(この間○○さんに偶然あそこで会った, 等)

3) シュートカ (Шутока, “Joke” 突っ込みなども含むらしい)

4) アネクドート (Анекдот, “anecdote” 小話)

このうち 1) は 2) を含まないが 3) や 4) を含むという。上記の「本当のロシアの男の話」は 2) と思われる。

また、フランス語においても「面白い話」の面白さは、*drôle*・*amusant*・*intéressant* 等、さまざまな概念と対応しており、そのことは（日本語で言う「面白い話」なのか）と確認してきた）インフォーマント 3 人全員に認識されている。

但し、この節で注目している言語差は「面白さの具体的内容」に関するものではなく、あくまで「体験談か否か」に関するものである。日本語母語話者の「面白い話」の中にも、少数ではあるが、上記 1) からの逸脱を感じさせるものはある。2012 年度の 20 番「病気の話」は、身近なところで見知った認知症罹病者の体験談などをまとめて話したもので、これは「趣深さ」という意味で上記分類の 2) に近いと言えるかもしれないが、体験談であることに違いはない。

日本語を理解するロシア語母語話者・フランス語母語話者に対して、「面白い話」という、1)～4) をカバーする最も包括的な日本語で指示をおこない、それに応じて「本当のロシアの男の話」や「大きい口のカエル」のようなものが 28 編収集段階で既に現れたということは、日本語文化に見られるほどの体験談への強い傾きがロシア語文化やフランス語文化にないことを示しているのではないか。

とはいえ、「たとえば「最近何か面白い話ないの?」という問いが、相手に最近の面白い体験談をするよう求める発話であるように、「面白い話」という日本語の単語自体、包括的とはいえ、体験談という含みのある意味を持っている。「面白い話」をするよう求められた日本語母語話者がほぼ決まって体験談を話すのは、この含みにしたがっているに過ぎない。そして日本語学習者が時として体験談以外の話をするのは、彼らが母語話者と違って「面白い話」という単語のこの含みを知らないからである」という別の考

え方も現時点では不可能ではない。このことは今後、たとえばロシア語母語話者に対して日本語を介さず直接に「1) または 2)」といった形で「面白い話」を求め、非体験談がどれほど現れるかを調べる形で検証する必要があるかもしれない。さらに収録を続けて結論を得たい。

4. 「面白い話」の話し方

同じ内容を日本語で話す場合と他言語で話す場合で、話し方に違いがあるかどうかを調べるにあたって、まず注意しなければならないのは、話し手が両言語に関して有する能力の違いだろう。たとえば「自動販売機」(2 番) の話を日本語でおこなう女性の学習者はしばしば顔をしかめているが、母語であるロシア語では始終笑顔で話している。彼女が日本語を話す際の苦しい様子は、身につけている日本語のしゃべり方として理解するよりも、慣れない日本語を話す際の負担として理解する方が妥当と思われる。

だが、日本語での話し方と、母語での話し方の違いの中には、単純に能力差として片付けられないものもあるように思われる。たとえば、聞き手がおらずビデオカメラに向かって 1 人で話しかけている「大きい口のカエル」の話し手を見てみると、母語であるフランス語でしゃべる場合は全体に笑顔が基調になっているのに対して日本語でしゃべる場合は笑顔が失われているという点は、先の「自動販売機」の例と同様、学習言語の負担による違いと思えるかもしれないが、実はこの話し手の話し方はナレーションの部分とスイス人農夫たちのセリフの部分で異なっている。むしろ、日本語でしゃべる際の表情「ナレーション部分では真顔で、(鈍重そうかな?) スイス人農夫の発話の場面は渋面」の方が内容から考えると適切で、母語のフランス語でしゃべる場合は、お馴染みのスイス人傭人をすおかしさから、その表情が全般にやわらいでいるように感じられる。実際、このインフォーマントは収録後のインタビューで「フランス語では話の流れで「面白さ」がつかめると確信で

きるので極力役に入り込まないようにしたが、日本語だと理解してもらえるかどうかかわからないので自分から笑いを誘うように役を「演じた(?)」と述べている。

さらに「英語」(22番)では日本語とロシア語の違いが際立っている。自分たちが中学生の頃、遊園地で英語で喋っているのを小学生が聞きつけてイギリス人と思い込んだので、自分たちはリッキー・マーティンとジェニファー・ロペスの子供なのだとして小学生を騙した、という話し手の日本語での体験談を聞いた相手は「馬鹿な子供」のような日本語のつぶやきを発し、一定の理解に至っていることが伺えるが、話し手の話し方はあくまでおとなしく、聞き手もまったく盛り上がっていない。それに対してロシア語での話は日本語に続く2回目のも(しかも聞き手は同一人物)であるにもかかわらず、話し手は感情豊かに話し、聞き手から「パパラッチ」や舌打ち音、笑いなどさまざまな反応を得て盛り上がっている。聞き手の理解度の違いによるという可能性はなお捨てきれないが、彼らが日本語のしゃべり方としておとなしいしゃべり方を身につけているという可能性もあるのではないか。このことを検証するには、「初回が日本語で2回目が母語」というサンクトペテルブルク国立大学関係のパターンの収録を増やして、聞き手をロシア語母語話者にすることが考えられる。さらに、「日本語に限らず外国語だからおとなしかった」「単に2回目だからおとなしかった」といった可能性を吟味するには、「初回が母語で2回目が英語」「初回が英語で2回目が母語」そして「初回が母語で2回目も母語」といった収録をおこなう必要があるだろう。

5. 「面白い話」をする／したことに対する感じ方

「面白い話」データベースは、コンテストにエントリーした作品のみから構成される。したがって、どれだけインフォーマントがコンテストへのエントリーをどのような理由で拒否し

たかは、「面白い発話」のデータベースには現れない。

だが、そもそも「面白い発話をおこなうこと」への関心の程度や、「面白い発話を、慣れない非母語でおこなうこと」さらに「自分がおこなった面白い発話をネットで公開されること」への抵抗感の程度などは、個人ごとの違いを超えて、文化ごとに違っている可能性がある。それぞれの言語文化における「面白い発話」の姿を全面的に明らかにするには、発話収録だけでなく、「面白い発話」に対する意識の調査も必要であろう。そこで、ロシア語母語話者について、エントリーを了承した者(収録前・収録後)だけでなく、拒否した者も含めてのアンケート調査をおこなった。

アンケートで問うた設問は、「面白い話を視聴することが好きか?」「面白い話を人にしゃべることがあるか? あるなら、その相手は誰か? その時どのような気分か?」「面白い話はウケるか?」「面白い話をもっと面白くしゃべれるようになりたいと思うか?」「日本語で日本人に面白い話をできるようにしたいか?」「ロシア人/日本人がロシア語/日本語でおこなっている面白い話がネット上で公開されるとしたら視聴したいか?」「面白い話コンテストに参加したいか? 参加したくないならその理由は?」というもので、全ての設問は「面白い話」をめぐるものである。

また、エントリーを承諾した者に対して収録後におこなったアンケートでは「面白い話を日本語/ロシア語でおこなって楽しかったか? また参加してみたいか?」を問うており、ここでも設問は「面白い話」をめぐる設問と言える。

だが、ここには第3節でも触れた、日本語「面白い話」の翻訳問題が関わってくる。つまり、日本語能力の低い学習者にも回答してもらうためにアンケート調査をロシア語文書でおこなった段階で、日本語「面白い話」をロシア語に翻訳する必要が生じ、そのため単純に日本・ロシア・フランスに同じ設問を問うて結果を比較す

ればよいというものではないということである。

以上の点でアンケート調査は限界を持つものであったが、インフォーマントの意識を或る程度明らかにできたと考えている。主なものを以下に4点挙げておく。

第1点、調査対象となったロシア人日本語学習者は全体的に面白い話を見聞きするのが好きで、自分でも面白い話をし、それを楽しんでいる。

第2点、彼らは「面白い話をもっと面白くしゃべれるようになりたい」という欲求を、ロシア語よりも日本語において、強く持っている。これは、自身の母語能力については、一定の自信（あるいは諦観）を有している一方、学習言語については不満あるいは「伸びしろ」を感じているということかと思われる。

第3点、インターネットで公開される「面白い話」については、日本語・ロシア語を問わず、日本人が話すものを「ぜひ視聴したい」と答えた者が半数近くいた。しかし、ロシア人が話すものにはあまり興味がないようである。

第4点、ロシア語と日本語で話した者13名は収録後、日本語で話した感想として全員「楽しかった。またやってみたい」と答えているのに対し、ロシア語で話したことについて3名が「楽しかった。でも十分」、1名が「つらかった」と答えている。他方、ロシア語だけで話した4名は、全員「楽しかった」と回答している。

ロシア語と日本語で話した者のうち少なくとも一部は、日本人にもわかりやすい話を選んだ可能性がある。つまり、聞き手（日本語母語話者）や収録時の雰囲気から、「ロシア的な面白さは求められていない」と判断し、ロシア的な色彩が薄いものを話したということで、収録にあたった奥村にも「日本人にも分かりやすい普遍性（授業の延長）」が実感された。収録後のアンケート調査で、話の内容について（日本語でもロシア語でも面白いと答えた者もいた一方で）「簡単な話」「ロシア語にすると面白くないので恥ずかしい」「日本語で通訳すると変なロシア語

になった」とコメントした者がいたのは、そのためと思われる。ロシア文化の面白い話はロシア人相手にロシア語で話す形でない収録は難しいのかもしれない。

それではなぜロシア人は、面白くない「面白い話コンテスト」にわざわざ参加したのだろうか？ 収録後のアンケートに「単純に楽しい」「日本語学習としてためになった」「実際の聞き手（クラスメートやビデオを視聴するであろう日本人）とのコミュニケーションの場になった」というコメントに見られるように、彼らは、教科書や授業の中にはないリアルなコミュニケーションを欲しているようである。

中上級の日本語学習者は発表などをおこなうに際して、ともすれば使い慣れない難しい文法・語彙・表現を用いることに集中し、聞き手への配慮がおろそかになりがちである。他人の発表は聞かないということもしばしば生じ、奥村自身も指導の困難を実感していた。しかし、「面白い話」は聞き手が面白いと笑ってくれることが一番の目標であり、聞き手の立場を理解しながら話さざるを得ない。授業で口を酸っぱくして言っていたことが苦勞なく通じたという感触が得られた。具体的な回答を以下に挙げる。

ロシア語と日本語で話した13名のうち、アンケートに答えたのは10名であった。その10名の中で、日本語だと多少難しくて恥ずかしいと回答した者が3名いたが（ネット上で作品とともに公表されている話し手のニックネームは各々「ウィンター」「マック」「なすちゃん」。本稿読者がネット上のエントリー作品と照合できるよう、ニックネームを記しておく）、収録後は全員が面白いと回答している。1名（一郎）は特に時間を取られないならと参加、他6名は積極的に参加した。この6名の回答は以下の通りである。

ニキちゃん：面白そうだった。

焰：やりたかった。教科書を読むより面白い。

ロシア語よりも面白い。

伯爵：まだ経験がないのでやってみたいと思った。

きつね：初めてなのでびっくりしたが嫌ではなく、面白そうだと感じた。他の先生は私の生活に関する面白い話に興味はない。

リキャ君：言語（学習）に役に立つと思った。話す技術や人前で話すこと、など。

ビキ：（日本で）有名な人になりたいので、やってみたいと思った。

また、第2節で述べたようにサンクトペテルブルク国立大学では、日本語版収録の後でロシア語版を収録している。同じ話を再度ロシア語で話すと面白くなくなると感じたり、違和感を覚えると話した話者が4名いた。彼らの回答を以下に記す。

焰：ロシア語だと恥ずかしい。

ニキちゃん：同じ話をロシア語で同じように話すことに難しさを感じた。

リキャ君：ロシアの人たちは違うユーモアなので面白くないと感じると思う。

ビキ：外国人が見れば面白いと思うが、ロシア人なら話し方が違うので、恥ずかしく思った。

再度ロシア語で話すときに原稿などを準備した者はいなかった。但し、日本語版の内容を多少発展させて面白く話そうとした者が5名いた一方で（焰・ウィンター・マック・ニキちゃん・伯爵）、日本語版・ロシア語版の内容の等価性を重視した者も5名いた（リキャ君・きつね・ビキ・なすちゃん・一郎）。後者のうち、「ロシア語にすると面白くない」と回答した者の追加コメントを挙げる。

リキャくん：ロシアの人たちは違うユーモアなので面白くないと感じると思う。男女関係など低いレベルや、特別な時代にもっと知識や情報があるような政治、歴史の話。ロシアのユーモアは（今回の）日本語の話よりもっと印象と情報を求めることだと思う。例えば、私が言った「授業をサボる話」はロシア人にちょっと普通に見えるだろう。

う。ロシアの冗談のために何かもつと異常なことが必要だと思う。

ビキ：外国人が見れば面白いと思うが、ロシア人なら話し方が違うので、恥ずかしく思った。（ばかな話や人種差別などブラックな話で、何も考えなくても自然に話せる。準備すると面白くなくなる。（第3章の3）シュートカの掛け合いの突っ込みのように）つまらない話でも面白く話せば面白くなる。

6. まとめ

本発表では、「面白い話」の多言語データベース構築という作業を紹介し（第2節）、収録された話の実際を、「面白い話」に関する意識調査の結果とともに具体的に示した（第3節～第5節）。第3節～第5節で得られた暫定的な観察を以下にまとめておく。

第3節のまとめ：日本語母語話者の場合、「面白い話」と言えば個人的な体験談がほぼ全てだが、学習者の「面白い話」には体験談の他に、個人的な体験とは切り離された一般的なジョークあるいは小咄のようなものが見られる。

第4節のまとめ：日本語での話し方と、母語での話し方には違いがある。日本語学習者が日本語のしゃべり方としておとなしいしゃべり方を身につけている可能性がある（第4節）。

第5節のまとめ：「日本語で話すと面白いが母語で話すと面白くない」という学習者の感じ方があり得る。面白くないコンテストに学習者が参加したのは、学習者がそこに、教科書や授業の中にはないリアルなコミュニケーションを感じ取ったからという可能性がある。また、日本語教師側にも、「聞き手への配慮」という重要な事項の教授にコンテストが有効に働いたという実感が得られた。

謝辞 本発表は日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究（(A)23242023, 研究代表者：定延利之）の成果を含んでいる。

参考文献

- [1] Wierzbicka, A., (2003) *Cross-Cultural Pragmatics*. Berlin/New York: Mouton De Gruyter.
- [2] Leech, G., (1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- [3] Sperber, D. & D. Wilson., (1981) "Irony and the use-mention distinction", P. Cole (ed.), *Radical Pragmatics*, pp. 295-318, New York: Academic Press.
- [4] 小泉保, (1997) *ジョークとレトリックの語用論*, 大修館書店.
- [5] 金水敏, (1992) *ボケとツッコミ——語用論による漫才の会話の分析, 上方の文化 上方言葉の今昔*, No. 13, pp. 61-90, 和泉書院.
- [6] 定延利之, (2011) *日本語社会 のぞきキャラくり: 顔つき・カラダつき・ことばつき*, 三省堂.
- [7] Schegloff, Emanuel A., (1993) "Reflections on quantification in the study of conversation", *Research on Language and Social Interaction*, Vol. 26, No. 1, p. 99-128.
- [8] Sadanobu, Toshiyuki, (forthcoming) " "Funny talk" corpus and speaking style variation in spoken Japanese," *Proc. Of NAJAKS 2013*.
- [9] 大島希巳江, (2011) "日本人がおもしろいと感じる話の傾向: 日本一おもしろい話プロジェクト (2010年4月~2011年3月)の結果と分析", *笑い学研究*, No. 18, pp. 14-24.
- [10] 金水敏, (2003) *ヴァーチャル日本語 役割語の謎*, 岩波書店.